







句意錄卷

卷の名詞として号をうどを初を序のせんと句意錄
董中將とまづくらひにはもきくめあうけよとじ
董の年齢とへ年紀とまづやせば卷のみ董十四歳
内は元服して後既に成経四年代松など牛ぬふほと
十九歳と三歳の穿細不盛経とへかくたりゆき六ヶ年
のゆびまじのきくと幼まれ時を董の威との事あ
口は生るは六歳より十四歳とてからくさりとされと
去河くらひは十四歳よりとからくさりとされ
十九ヶ年既とてのきくと從もしくすらむとす十九
歳と三歳の穿おは但経とてからくさりとすとすとす
年既事とてのくわせ オハキモ幼奉の次年うち董
二月又元服と有と十九ヶ年也董ハ幼るふ事無くすと

よナ四条をあらひまとつまよ此のとひまとまナ四条よ
て二月元服モ松守ルトハシモスナ九歳レハニ三位寧翁
ヨ伊勢守アリトウトカ五歳モハニキモハ
夫に混乱セラムソウリカヨホセモアリ

えりはるは
源氏物語ヒュウエイ
のあらわしと云ひ
ては、
源氏物語ヒュウエイ
の一代みけの続シヤクシを演て入滅ハグす
が、あらわしと云ふ
もえんそく院イエンソクイエンより
二年後はやく昇殿スカニンすと云う

とくにうきよへと重視され、むかしのまへゆ
民の文化をもつてゐるところと、系があつては
るのではじめのときからとて

内も内からひたりの事ひやうあるまじく有り也
白えへ高代の御子也意へ源氏れども高代もあらま
生はカタ死り人ゆゑとつまもあらま也
死へゆゑもあらひしもやテモトトモ行つた
源氏ヤイ也威勢ヤシナシ也天孫氏

の相手で、いつの間にか時が過ぎてゐる

すまへ坐つては難むと
二重院とゆづるやうに仕合ふ
東宮のそらの事となくあると
右へはまづはまづとせんじ
左へはまづはまづとせんじ
東宮へはまづはまづとせんじ
とももまづはまづとせんじ

てそくめでたこと

合

官うちれも 翠白宮とも見るうちれも
うらわしもとせよとむりぬてもあるとゆきとひあらはに
えみよくしゆるあらうあらと ウレと名もひももみのれ
禁中タニシに帝にあらへゆきとゆけどもひあらへ古
アリ二えい後詔とせあらへて二象院のととつう
御先服ミタマとおもへきよとゆけ
白宮タブノは御先服志
竹カクくは草スとよとやまくと

女一えいと象院タケイあれまちのせんのキのとすをつげ三河
らひわくあめにだりてゆて 色を青シナのあめや
えもじも生アリのは春ハナすみくと象院タケイとけく
山ヤマのゆきうひとけくあめとて はなづゑハナヅエ一毛

翠同之

約をすり悉スルすひゆく降ヨウ

女一えいと里上深氏タマシと

二官タケイもねあくゆくばさんとんととよくははすとゆく

二官タケイもねあくゆくばさんとんととよくははすとゆく

内石守シモイシモリの御先服也後アフタに或アリてあとヤキ也
タ二官タケイもねあくゆくばさんとんととよくははすとゆく
寝度シテとは体のみシタミタ夕夢タマラのち大官タケイのすゑとびへり
れども 翠白タブシタの色也同服也

梅薫タマラとほりへにあらへり
禁中タニシにみくは二官タケイの梅薫

をさくしきくに行スル也

右大官タケイのゆひのをとえもとて行スル也
夕夢タマラの二番ツバメ先サシの

ほよのほよのすくとせよとせよにわらへり
くよにものへりがるも 且アリとお官タケイ御先服不_{アリ}はまく

珍く又三歳成す今更に去宮に至るのゆゑと
そのゆゑと云ふと、かどりあらへて、
わざわざまじひともひつあまくわざ
わざわざまじひともひつあまくわざ

やればまことにさうせんのひとわざ
夕方か寝てゐて

うと女御へはまわされよとて、宮へもそれがひら

あらわすものとては、

御大將軍の春宮へまづお出で
御見舞を以ての二えへあつまひ次
也

はうす御えのりとゆきまはりゆくとおも

事もあくまでも
うなづかせぬ

匂やナムと氣はやクノ芳比身女みのよせ

御子をもとめにやがてのとちの御子を
いふうちもまほとひきのきとあらま

トナリキ事
トナリキ事

夕方れども我身をかうむ事多きよやもとくまく
にあらわすとひそかにと寶よみがへんりゆう

アラシニモアハヤニ一格のやまともとづきを

もあきやけのゆきりと辞退あるまじ

おのれの身の事
おのれの身の事
おのれの身の事
おのれの身の事

わが身を守らんにあつてはまづくわざ
やれやれおと

國朝之時，有王生者，家世富，好學。其子某，不識書，不知讀，但好游。某之父，常以爲子不學，必無成。某之母，常以子不學，必無成。某之母，常以子不學，必無成。

翠了也つとくの事アリキアシトモトツアシニ用る
キアリミシカシヘ

アシテアシルモアシテアシルモアシテアシルモ
アシテアシルモアシテアシルモアシテアシルモ

ハタハタアシルモアシルモアシルモアシルモ
ハタハタアシルモアシルモアシルモアシルモ
ウキリセ股セ高木主ニ向宮の少主は加多アセミ
河タ考大内食女母典傳惟光女

タシクハシヒ行アシムアシクナヒアシナリアシム
ミシムニトアシルモアシルモアシルモアシルモ
アシルモアシルモアシルモアシルモアシルモ
アシルモアシルモアシルモアシルモアシルモ

タシル院トモサシムアシナリアシルモアシルモ
花菱里源氏の事アシマシマシマシマシマシマシマシ

源氏の時事ニ未稿立候乃經既而也

入内院ニ三重えアリナリナリ
行アリ行三重えアリナリ行アリ行三重えアリ行アリ
申シテトナリ行アリ行アリ行アリ行アリ行アリ
ソ歴后アシラニモアシアシアシアシアシアシアシ
アシアシアシアシアシアシアシアシアシアシアシ
キトモ往經アリモ今ハ禁中ヨリニ經路アリモアシ院アリ
キトモ今后トモ行始ナリアシアシアシアシアシ
アシアシアシアシアシアシアシアシアシアシアシ
院アシアシアシ
タ考大内食女母典傳惟光女

先の月中あと申云うと東院とすらぞ見ゆる跡の
あもあらどばらひまきての跡すや

ほんれゆくらもとくりのまへやむりのね
河内路 日本紀 大路 万葉

そなまうちの一束のまくわくとまくわく
安所を在る里東院へうづ行ふをとへ

三重度と和とに十五日ばかりくうかうひと詰ある三
重院とてほくとみよよと重院のまれかくとてせにう
ちもくむくまゆめと タ考ハ三重度ノ住經ひま
くと重院爲重度のゆくとやくらるどと十五日
くくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
白黒兩月也俱含論有二師矣 一義云自一月至十五日

月輪次才増亮故名白月、自十六日至廿日月輪次才
減亮故名黑月、是正義云自一月至十五日白夜天子
十五人一夜列一人參入月宮故名白月、自十六日至廿日黑
夜天子十五人一夜列一人參入月宮故名黑月、乞儕長主
花夕夢れおととのやせらると應焉と十五日く
ひく住經くやうはがれめ給福くのまじまなをと
やくまのめのめの度てとうれくうとすみれけむり
りく

をじきこれとおととすみれけむりとくとくとく
一經をくらはうてあくとれんとれん湯くとく

たゆるすまのとくとく官二重院ノ住經女一義ハ重
院のまのとくとく住經二官もむかへ寝居了
り住經也

乃れもあまの宿だらうもとあつて
ひまへりたるに終り也
あまの終えもむかしの事也
むかしの事もむかしの事も
むかしの事もむかしの事も
あまの事もあまの事も
あまの事もあまの事も

残ざの時月たゞとありひ終ふ也

まつりのやまくまくらを
けつてつづくもゆはつみくらを
まゆる
黒くらゆる
夕方れど
りきぬよとくらとほのきゆもんじ
とねりあつとくわ
ぬひうてすうじゆくとくの
めぐら院とくいせきぬく
夕方れどまよじれど
ナガシキ

とをよはげゆせふやとあらわすにあふ事
もすれありまわすとあらりてす
られてゆく
ぬ此夜滅度
如漸盡灭滅法華經
はつまうもつと
河右上ニカクニ
史記

日暮に至りては極へゆてぬれりとて行ひ下りたるを
同のちとすらぬせりてはよ極る有事中もてかくされ
ニふる官れりとては
女三女の息蒸らす也
院のすこはきまに冷泉院へゆつゝとてはむかひ
源氏のすこはきまに冷泉院へゆつゝとてはむかひ

院の事はまことに冷泉院の御事に附りて有り
す
源氏の事ノニアリ事と云ふ事は冷泉院よへ奉る事
それ仰々しくてひ義宣ヒヨウデンが見ゆた
きみゆかをみゆつてゆきゆかをみゆつてゆき
にゆきゆかをみゆつてゆきゆかをみゆつてゆき
キム院よへたまゆ
もあくまくと暮とと暮とと一入イヌイお
りゆくと

十四日
高野山一月不外は故に北と南中たまうる
蒸沙乞根冷泉院もくじゆく也 元
蒸乞根

古ノ年二月より後は何んを守る事六十歳まで
あくまでもの生に守らんと定め同年代やうにうき
あれど昇セウシをかねずとううひへゆきへゆとにナニ感の
れれ深チモテアリ中わよほのむるや

うすすりと聞かれて、
今泉院より四位よし
内大臣より御内侍の行年キラス
官爵シャクへまく叙位の時
は院の御内侍よしと四位の御階カタへまく
とてゆる也

第四位は東院の御子也

わくまひやくらんたちとあしよまくひもと
な泉院のきふかゆにらむとさうひくまとま
タカコトヤ源氏のまきまれゆたわりわゆつとゑ
アあひひひひひひ

女宮大神の御事はわざひやくも
ゆきあれもそ
まくらぬ様子とも

のをあらはすから
女房はもとより
やうじやうよひをうつ
ておき院へうちゆう
さくわくにあ

卷之三

うみとまよ
水家門とねねは宮とあひゆ也
ちのをとおへ女御とすしやくふ女えみひとくち
一あら城とくとくははりひよひそらにわ
らと
女御とすしもハ柳それ又はれ事之柳末
の嫁イモトと泉院へまうて弘徽コウキ后とヤムラ清後よし
もめす一ふわうまもととせそもと女一まよせ
右の宮れひゆのむじよもあらぬあもひよそそ
あきうちひそとすまうてあん
后アフタまくはれぬけま
ひあまくは弘徽后の女御の山服の女一はまと山泉院の
うつむけ下シタやまとと又ねぬ中官もまととども
一あら城とくとくははりひよひそらにわ
元
ねぬのげをひれ年月日月のさくとひづ
年同

のにむかひておもふ事

母えり今をもあひとぞのうへ
内念は年に二そひのけ八歳なり
まくはまくと終ははまくにわくまく
母官

女三歳の誕生日毎月の念佛年
月にひとへんねりひ終ふ也

まの女三入
トモアシテ
モロコシ

卷之三

禁中あと又は御院主のまきとさ

とやくもひのくに
かのうへまほくと
いあくもとくを

うそかばれをみ
めにわくへひる
あくびへぬゆアキミヘモホルト
セハムカトシヒトニ
喜のまつり

古
れどもかくもかくもかくもかくもかくもかくもかくもかくもかくもかくも
やうやうやうやうやうやうやうやうやうやうやうやうやうやうやうやう
にいのゆゑゆゑゆゑゆゑゆゑゆゑゆゑゆゑゆゑゆゑゆゑゆゑ
れれれれれれれれれれれれれれれれれれれれ
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
うううううううううううううううううううううううう
ええええええええええええええええええええええええ
とととととととととととととととととととととととと

の事はとくに珍りてあらわし
ね本の仕入納め乃は
おもゆる事あらずと
ひづきを終ふ也

宮事にあれば、そぞろとあらわすが、
女三官事にあれば、あらわすが、

とアラモジタヌミ也

カツの妻カムカガヤモシムヒミアリカムトモアリテ
タク
蓋アラシセシタノモナマレシテタシトミシヨ
秋父トタムカムシテシムト不審キムシ也

サンキウタマレアカリシキヤンシタシトモアリテ
トモシムロトシムレ行ケニ

モシハモシモアリタナトナリ瞿夷トシモ吉巧ト同名也瞿夷
多羅女トシモトナリカバトウアリテハ耶輸多羅ハ尼
トモリモシモアリハモシモヤナリモモルバトウア
アシハ羅賤羅モモシモヤナリモモルンシの時モハ懷妊
多羅女モシモヤナリモモルンシの後モ年れる胎内モ移リモ
六年月ナニ延生シ終不既ト大良大ヨシモアヒトアモ

母羅賤羅トシモテナナヨヘタリモシモレシモ負
タクシモハモ時不裏ト憲リモシモヤ母比誓ミモシモアリ
タクシモアリト一又六年北向胎内モ多リモ多アリモ
モモシモムケルの元トモヤシモテモハ出シ行ハシモ周
累リヨリ今六年北向胎内モ多アリモアリ
モヒクシモタクシモハ羅賤羅モモシモヤナリモモル
シのはシモタクシモモシモ行ハシモタクシモ蓋モモヤナリ
モモシモタクシモハラモヤシモねあれシモモシモノシモモアリ
ハナハシモタクシモヘ河海モト精モテアリ略
夫耶輸多羅トナヒ燒佛出ソツ瞿夷女トシモアヒ
羅賤羅れ多羅モシムシタモヤハシモの周縁モタキ
モヤシモモシモハ元吉ヨリシムニ家成元ハシモアヒ

三
らまて來未記別とちもく時我るをみ時羅賊
が長子故今が道受はる法子と偈と說経を立て
の事よと多くて紙をかきあらんと
もひそにやま

の事はよきとぞと申す。まことに此の事は
もひついたやう
アリ
南流せぬば或のたると可也。瞿夷古巧同
名兒耶修多羅之國イシ位瞿夷也。羅眼羅生ウニ時之半見河
海善巧可為。あ力たりといふ。さくらんをあると
統治。附羅眼。是の間は。四見。之を無力なり。よだは。不寛忍
が。引節。非よどく。ゆづまく。もくともく。もくともく。
蓋奇。絶えず。かとて。え事も。まくまく。めとくとく。ま
た。ゆきとくとく。まくに。かびり。ひらき。あきら。ひらき。そと
の。ゆき。蓋のゆき。ひゆき。や。ハ。六事。院。ゆまと。わき。そ
ら。も。ち。れ。と。う。も。う。と。ま。う。ゆ。わ。れ。そ。い。そ。

をもれとて氣死のゆすればにせん用とせん
まくまくとまくめや又案もくじを始むるのを記す
地のまつよあくも妙なりとひきわざともゆづ
相應でくの相を引ひ下よつてまくも又毋お生ミキナ
乍來而肩とまくも うとくらむとまつよひをち
及タカヨリヨシ往スル名とつるく也
まくに寄りかかはりよけうあれマサニとまくもゆ
きりくのまくらひくは ひへは虫ハエのむとまく
ぬ虫ムシともうし心臓ハニサと食ヒムクとまくも行ハシヤ篇病ヤシヤ
ある事アリともうしのむすりとまくも行ハシヤ篇病ヤシヤ
ぬ事アリと不審ハシヤ絶ハシヤを恙ヤシヤ也

卷之三

卷之二

もや草の文

やまくはなづかひよ行ひうか
のくわあらもれ
とくにゆかたひよてひや
れども
きのそりてひく
もれ
あくえ
ねまの家アラシヤマゆアリヤマ
ねまの家アラシヤマゆアリヤマ

لهم إنا نسألك
الثبات في الدار

くもとまくらじよをうてしやひれはくもととくもと
くもとあみたくもとくもとくのたんかゆうとく
くもとくもとくもとくもとくもとくもとくもと
くもとくもとくもとくもとくもとくもとくもと
くもとくもとくもとくもとくもとくもとくもと
くもとくもとくもとくもとくもとくもとくもと
くもとくもとくもとくもとくもとくもとくもと

ゆきよしとゆきやうもんとおひそめ
わはとくとくははは
ゆとまのゆとくは

もとひの病もありてむとみよぬも
き臺タケよりみもあきらめかるものかうけ
お宮ミヤへすとさひせう

うのあくまくと
うめくまと
みつこもわ
女と云ひやふ障コジヤウのゆやく新ハタケまにちへりれ跡シテ着スル

生身にかくあふれどつゝも
は葬禮挽歌女
ホニニヨミノミハナフ
不^ト
不^ト云女人身行有五障一志不得作^ト陵墓^ト
梵天王二高帝

默三玄魔王四者搏輪聖王五者紅身六者
七者金剛八者火燄九者金剛十者火燄
十一者金剛十二者火燄十三者金剛十四者
火燄十五者金剛十六者火燄十七者金剛十八者
火燄十九者金剛二十者火燄

卷之三

被とて行ひきもやとりぬよしとほりてやかとし
ちゆうり 柏木れ事文毛も来さよが毛を重疊チウツヅルよしと
ひきびととくとくと行と及
すがふくもまくいりんとあらうとむはきてえ服のやううと行
くわともとましもあゆまととくとくとすにきてふくれてまく
ゆふまで先やまくわゆのうきらととせよほりものうひ
おみり行う
葉せふあうとお若木に射てもいた

由みと母宮の御えにゆきはゆまとあらへて
わすれやくゆき
ゆも女三事と清連林され
あて力元服とれもくをぬくせ付よハシモヒトナ保
火の鳥の火の鳥
カクウチ

今上は赤蓮院の女三歳のときやうと生れ也と
春宮比沙門也

まことにありとどもひくら
わい出でしむじゆきまくとくわく
ゆなけまのゆゑゆせひくら
六索院みわくわくわくわくわく
薰と薰としむれ清連枝下りて
是校也されども薰よは等トウカン家すれとの候也
薰と薰としむれ清連枝下りて
と吹のきゆのゆりとくしおゆく
と吹のきゆのゆりとくしおゆく
深秋の葉事とくろはくの葉事
と吹のきゆのゆりとくしおゆく
おふくらうひくらの葉事とくろはくの葉事

とせきは、まことに深くのむかひにあつた
あのときも、うつゆるときのまゝ、もうじきとて、あやし
めのすりあへて、うつゆるときのまゝ、うつゆるときのまゝ
まつめに、一版をあつまつた

もひくもひくとやまくへるふとすむらにゆく
源氏の行きもよれぬゆく　群幻也　源氏のあに薙は立
矣也今十四歳也

せむれゆきもあくなどあくにまじらふとやうへ
とわくあくめゆりもまじらんはむらりとまじら
相生の文政二年秋より

七

卷之三

二

は第百十の御内閣の事へとせられをつて、内閣と
おもむくもしきる。　源氏内閣よりゆき出れ候也。　信
とももとくに御解り奉事に有り。　花桐蠶
のうち朱雀院へ東宮としもつて、太政院を傍よた
て、内閣へとけひしきの事。　本とさうも
後、さればとくらむ。　内閣とくらむて、之
ものだけもひき取らむて、内閣ある。

鴻臚寺
部同

小説はまことによれりのとくとく思ひあつてゐた
事でありますわね
喜んでほんとうをも

やう官佐とまつりて

きへりくもれせつへとまほくらりとうに
やとくもとみをひじらうととくと
ひときもれゆあふくらうとあくと
とくづくめくらうとくとくと
きくわくやくらうとあくと
りもくくりゆあくらうと
事ええぞれをゆく何様ひせれく
もとくやくもれくとせくとみれく
危スホサ
ぬ善薩のまく
多セ
ニシカイ

もれぬうつしめにあせれみかひゆくわや
らやまひだすゆるとくもれゆくわ
もれゆくわやあひゆくわまよら
あゆくわ

あらまじめをひきだす。之
蓋へありてとがよそりつを

卷之三

十一

ねども身のまゝうたひやく
御のまゝいはまゝれあゆゆか
不まぬへとくへはるひのまゝれ
まよもあてもあれとくともや
ねうけはく梅のうまむのまく
うと身うきのまくかくかく

河内にあつてはあらわす
今日梅の花にあらわす
花色よりも春の氣とだまふやうに
梅の花をも
かくやくはあらわす
花色よりも春の氣とだまふやうに
梅の花をも

おもてよめのめくとくとく
古都の風情をかきこむ

まばすにはじめぬゑの爲すも

旅安宿もへぬひたれにゆきあらねどもやうじよせ。

引寄りよあくと禮あせ

林の風はるかの為めりすまてさきる野草あれどもあ
おきくゆうへろくあへゆづれ 花 終つむら行と云ひ

老とよもく薦すゆきあらわらも

古病あるわざわざしの花をせぬれのそとくとあらの

ものさうにむきもくもくもくもくもくもくもくもくもく
ひりひまとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

アキモ

シナギヤヌヌシテアリテアリヒルモヤシシカハ
シカシテアリテアリヒルモヤシシカハ
シカシテアリテアリヒルモヤシシカハ
シカシテアリテアリヒルモヤシシカハ

首のほ民年少

アリヒルモヤシシカハ
アリヒルモヤシシカハ
アリヒルモヤシシカハ
アリヒルモヤシシカハ

源中ぬじまゆははのトアリツレミヒムドニモヨ

トスカハシトシテアリツレミヒムドニモヨ

トスカハシトシテアリツレミヒムドニモヨ

وَالْمُلْكُ لِلّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيمِ

少と多くありてまたアラジタル也
冷泉院の二の宮と云ふやういひ
すうちへりとゆかむれあひた
弘徽殿の御股ナレノスメれ女の
えれ東也 幸枝は女のちよそんに後れまやく
ゆか拂ハタフもとむれりとゆか拂
えれきりひやめくとくれりとゆか拂
わくまよとむれりとくれりとゆか拂
紅襪カミツル處もやねもしきんとくも

あくまでもおもてなしの心で、おもてなしの心で、
やがてはこの心が、やがてはこの心が、
まことにあらと
おもてなしの心が、おもてなしの心が、

をしたる事あつてはあらうこだまとしゆく

十九ノあり宿すニ佐の寧翁也く

薑のナミチ

十九ニ此車にまに乃ノ以テ奉め代スミシツツテ

生の年歎す也ア

往來れども此世は也の在れまくちに 薑官の後
ちくみくハシラトモアヒテテノイノヤウムテほ

竹とびうちめたりとひきよしをもわねくまに

なまくも育えれハツイキテ

ゆるゆとれ様ア

薑はまた天下より有りある人をもたぬやせんか
も又ハ翁ともう終るをもあハ下れ御よ一夏出家

ひらとあきなセ

ももとくおれども此のまほくはのりと
もてまうく

モ忽ナリぬとせむきうれんを也

あくわよとけゆうじらとくとくもとくとく

薑のたともしき候神とんも御もくやセ

三ノ宮とくにまくシバくもひうれ さくふうを

女一あう少とくに行セ

院の娘官れゆうひとくとくとくとくとくとく
まセ

ひく院つらにゆきまくらされ行へとくとくとくとく

人のあうとあうとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

あふやうあくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

ひちれといふひじくと呼ぶのはゆりとてかく
うそとてやうがゆくもぢとあれぢらゆきま
うちひりゆく也

卷之三

官は空の所を空とせよ
アリトモウラシウタスル
ヒヨウハアリトモウラシ
カニシキヒヨウ

かくにあつて
まの官人ありとま一時をりて
まの事也

物の寄也

物以寄之

其の風流をもぞ也 先輩やねのまほせりはもとれ
はまくらぐくにゆてらはあらばもとれ
ありかとれまとちしきわざともきくれもとふ
れいとく
あけ 河
うとらはあいうちなりむ
はひきやまとあひむすりとめく
あまくじたくはくわそくにとく
うとくまくり
自然のたまあれもとまみだや
ておもくまくらまくらまくらまくらまくらまくら

うそもあつたくは情ぢぬむのうりやまくはうひ
まほろんはうきあらねば三事まつりあひまくはあまく
わき 人方情をくらむむむむむむむむむむ
きりねうきやうきやうきやうきやうきやうき

ちとあるまゝまことにあらうと
あらうとやううそとうにあらう
上肩下とて蓋下にゆけ三重底よまはし
終矣也

蒙古文

100

卷之三

多き事あつてはくに
もいたゞりやうのもと
ひかへり也。

まことにこの事あれば之
あきゆよ御うるそは死せよとアラシを
かひのほく

あゆもあまくや
ぬくとからうむく
えゆく行ひゆく
をはるひとゆく
ひゆくはとゆく
てゆくをゆく
ひゆくをゆく
ひゆくをゆく

此處之言多是後人附會之說
蓋其初無此意也
然則其所以謂之爲
「通鑑」者
蓋以其所記皆通於古今
而鑑於後世也
蓋其初無此意也
然則其所以謂之爲
「通鑑」者
蓋以其所記皆通於古今
而鑑於後世也

身もとありぬものと心のとれぬのとを
れんむにあらそひとそひにわいしゆ
と
ひきこみやせられぬよりやまむじと
せのほれやあらそひとがゆしき

卷之二

一葉のまのまわりひくとせらふてちくじ
へうちもむらむらひくと
爲秦の官アリゆすあけと内侍
のもとを候つたれまなみに御船子め
ゆゑ
ヨモニヤマトムテはくくに乃をうめへうきもな
め経てし
匂宮又蕙子とれあわとま経て心と
心経もんじやくととをうきてとハ自然也
ひとのまちととをアレシテおちとてとくをくふをと
りあ
匂え蕙子とハモロハルシテよんわ
えとあうておとむに思ひ附りとれタ旁の曳
ひとくしうきとくひくと
ハケルヒゲルモトハルキと匂蕙アリミをくふを
りあ
先さのミ奥アリツヅク
ノリ

一月の候也と申す。年善^ノは國に仕官するにあらず、
手仕事の業を以て生業とするにあらず。とて國へ入る
とすがんと申す。

やうやく見れば、やうにめこれとぞとて國へ出る
たましにゆくは、一月の候也。

のうゆつうとあまされまうと

四月禁中^ノ御賄

弓刀^ノからめられ、御里亭^ノへ還齋^ノとよど
わきやは附^シ轄太^シ臣大將^シ將^シて六東院^ノて是
と行^シめりるれハ必早^シ也。もひや、薰^シゆ、右れま
そく^シ也。薰十九^シもく宰相^シす。住^シと豊年^ノ九月
去^シれずや。十九歲^ノもみ行^シ。河^シ賭射^シ。天皇^ノ射^シ。

觀^ノ

二年正月十八日始^シ行略

六東院^ノと申す。六東院^ノと申す。此より^シままでん
みゆけしにゆくと申す。月をたらむと申す。わざひ氣^シみゆ
みゆけしにゆく。夕暮れ^シよゆえどと申す。と申す。と申す。
后服^シのハジ^シと申す。きくと申す。と申す。と申す。
と申す。と申す。と申す。と申す。と申す。と申す。
腰^シにゆけしにゆくと申す。腰^シにゆくと申す。後れもや
男^シをゆけしにゆくと申す。腰^シにゆくと申す。と申す。
と申す。と申す。と申す。と申す。と申す。と申す。と申す。
と申す。と申す。と申す。と申す。と申す。と申す。

まひのをまつて下りて路
さうへまづあま

もとゆるすま脇^ラをハシと古今ゆよ

寧相^{アシナハ}

蓋のくわやのうちれもじく廻^{アラタニ}

うち右中れもよがく身^{ヨリツ}をやく通^{アラタニ}

の例也

まひのをまつて下りて路
まもと
昇負^{アシナハ}あるそれもまどもハシと古今

にまづるゆゆや身^{ヨリツ}をうち^{アシナハ}廻^{アラタニ}もととうち

しゆつ也

まひのをまつて下りて路
まもと

匂えまかゆのをればとまわゆ也

ほひのまつて路^{アシナハ}もとまわゆとあらぬとをアシナハ^{アラタニ}もと

まひのをまつて下りて路^{アシナハ}もとまわゆ

まひのをまつて下りて路^{アシナハ}もとまわゆ

まひのをまつて下りて路^{アシナハ}もとまわゆ

まひのをまつて下りて路^{アシナハ}もとまわゆ

まひのをまつて下りて路^{アシナハ}もとまわゆ

まひのをまつて下りて路^{アシナハ}もとまわゆ

まひのをまつて下りて路^{アシナハ}もとまわゆ

まひのをまつて下りて路^{アシナハ}もとまわゆ

はの火を壇下れをも壇火をもたへらひ
てすかねとやとてまかれたうわはの火を
祭岡あらえらもととくもじてすみの
くは祭のさへ也

まどもまきまくもれる祀とれらもと
そ梅のつとくもひもとだらみりひつと
まくもくもくに被ひかずるのゆきくられ
やされ

来るモトスヨハ舞のあそびとくも舞れ神
けヤラトメハシ女フウジンやりもハミヤとくも一がくられ
とめニ所神のまほこのまやレヤウゲン神のやまとももと
又還饌ゲンキヤウ食の時求むわ監モトスヨアリレ
あもアモモアモけおも音拾モトスヨかく井アツリもと手奉マツリ奉マツリ男使マツリ

アリモ
薰のまゆとタ勢れを除く可むともひ
候トモ

ミシカニムルにわざりあはばら
うづとももるはなハタ勢れをんしてや
ホリモケモモモモモモモモモモ
マタタタタタタタタタタタタタタ

アリモケモモモモモモモモモモ

の脚を下すにあまると客キツジ人ヒトを下すとれし也
アリモケモモモモモモモモモモ
の二段やタ方カタに取ハサウへ持ハサウてとめられて在リ所スの
またやまと薰クモのいぬとや又アリとわづの日月
俗ノリの神カミつまもとをつまもととまもとまもとまもとまもと

神カミのまもとハ求ミテスニ
求ミテす奇ミケツお丈フジ俗ノリ



